

## 第9回 広島県中学校教育研究会健康教育部会研究大会報告

平成30年11月16日（金）「第9回広島県中学校教育研究会健康教育部会研究大会」を、135名の参加者を迎え、広島市二葉公民館にて開催しました。参加者の部会員の皆様からは、「大変有意義な研修会であった。」「内容が盛りだくさんで、大変参考になった。」との感想をいただきました。



- 1 趣旨 健康課題に対して、よりよく解決していく能力や資質を身に付け、生涯を通じて健康で安全な生活を送ることができる生徒の育成を目指す研究実践の交流及び協議を通じ、本県中学校における健康教育の推進を図る。
- 2 主題 健康で心豊かにたくましく生きる力をはぐくむ健康教育の推進
- 3 主催 広島県中学校教育研究会
- 4 主管 広島県中学校教育研究会健康教育部会
- 5 共催 広島県教育委員会
- 6 後援 広島市教育委員会
- 7 期日 平成30年11月16日（金）
- 8 会場 広島市二葉公民館（広島市東区東蟹屋9-34）
- 9 実践発表

(1) 発表1〈食育〉 「望ましい食習慣の形成」

～学校・家庭・地域が連携した食育推進を通して～

竹原市立忠海中学校 養護教諭 横岩 恵美子 先生

(2) 指導・助言

竹原市教育委員会学校教育課  
指導主事 小早川 善伸 様



《参考にすべき3点》

①校内運営組織体制の確立

食育推進リーダーを校務分掌の中に明確に位置づけてある。それにより、具体的な取り組みがバラバラにならずに繋がりを持つとともに、取り組みがどこまで進んでいるか、課題はどうかの的を的確に把握して推進できる。

②系統的な食育推進の計画・実践

食についての小中連携も大切なポイントであり、小1から中3の発達段階に応じた目標や着けたい力の設定がしてある。この作成により、推進リーダーだけでなく、担任も意識でき、前後の繋がりを持って系統的な指導に繋がっている。

### ③「つなぐ」をキーワードにした、3つのステップの食育推進の実際

特別活動や各教科と給食指導の関連を図っていること。また、「ふれあい健康カード」や面談などで個人の課題を把握し、その解決に向けた取り組みを大切に、自己管理能力の育成に繋げている。食に関する意識を改めることができる啓発的な取り組みで、生徒と保護者を繋いでいる。

《今後、大切なこと》

- ① 生徒一人ひとりの課題を明確にして実践指導をしていくこと。例えば、数値化・データ化をして、生徒が課題を理解する。その課題を生徒と保護者が共有していく。
- ② 食育担当の分掌と横の繋がりをつくる。例えば、食育と問題行動や体力作りへの繋がりを研究部や生徒指導と連携させて、学校全体で啓発活動を行っていく。

### (3) 発表2<保健教育> 「健康教育の充実を目指して」

～外部機関と連携したがん教育（出前授業）の実践～

広島市立温品中学校 養護教諭 臼井 則子 先生

### (4) 指導・助言

広島市教育委員会健康教育課

指導主事 佐々木 和之 様



### <よかった点・学ぶべき点>

#### ①事前指導・準備

- ・教職員を対象とした校内研修を丁寧に行ったことにより、理解が深まり、協力を得て取り組みが組織的にスムーズに行うことができた。
- ・生徒事前アンケートは、がん教育において不可欠とガイドラインに示されているが、それだけにとどまらず、個別の面談を丁寧を実施することで、生徒の不安解消を図った。
- ・外部機関との連携では、学校の実態やどのようなねらいかを伝えるなど打ち合わせを丁寧にするこゝで生徒の実態に応じた授業を行ってもらえた。
- ・保護者への周知は、生徒は知らないが家族や親族などに該当者がいるかもしれない状況の中で、保護者の理解が得られた。

#### ②授業当日

- ・パワーポイントやグラフ、写真など視覚的に訴え、いつも以上生徒に興味・関心を持たせ取り組めた。特に、「がんを防ぐ12か条」は、生徒は生活と照らし合わせて自分のこととして考えるきっかけとなった。

#### ③事後指導

- ・生徒事後アンケートでは、肯定的な回答が多く、知識の習得だけにとどまらず自分の生活に置き換えて考えることができ、生徒にとってとても有意義であった。
- ・生徒保健委員会で、当日わかりにくかった専門用語の周知など継続指導をした。

- ・保健便り・学校便りを発行することで、生徒がどんなことを学びどんな感じ方をしたのかを保護者が知ることができた。

#### ＜今後に向けて＞

- ・保健体育や家庭科、道徳など、各教科と関連づけて取り組むと一層の充実が図られる。
- ・この取り組みは、事前・当日・事後の活動が計画的・組織的に行われ、生徒だけにとどまらず教職員、保護者みんなが、がんについて考え、自分の生活を振り返ることができた内容である。今後も学校教育全体を通して、がん教育を含めた保健教育を進めていき、生徒が自ら健康を保持・増進していくことができる資質・能力を育てていけるよう、外部講師を招いたこのような実践を他の学校でも実施していくことが望まれる。

### 10 講 話

演 題 「健康教育の充実に向けて」

講 師 広島県教育委員会事務局教育部豊かな心育成課健康教育係  
指導主事 一本木 実香 先生



#### (1) はじめに

- 人生100年時代を見据えた基本構造が検討中である。生涯にわたる学びが重要になる。
- 平均寿命、男性が81歳女性が87歳。健康寿命、74.9歳で世界1位。高齢化率の推移等から、死亡数が激増し社会保障費が増大することが懸念される。
- 人口減少社会へ突入。世帯構造や社会環境の変化は子供たちの健康問題にも影響している。児童生徒の安全確保も問題。「健康日本21」でも「健康寿命の延伸」が挙げられている。健康寿命を延伸するための取組を重要視する動きはますます加速していく。

#### (2) 国の動向

- 第3期教育振興基本計画
  - ・ 自立した人間として主体的に判断し、多様な人々と協働しながら新たな価値を創造する人材を育成し、創造力、好奇心的探究心、実践から学ぶ自信につながる力をつける。AIでは真似ることのできない創造性、非認知能力、他者と協力し感情をコントロールする力、学びに向かう力を育み、新しいモノやサービス、イノベーションを生み出す力を持つ人材を育成していくこと。
  - ・ 教育段階に応じて体力の向上、健康の確保、食育の充実を図ることが大切。関係者の連携を推進し、協力して取組を進める仕組みの構築、専門性を活かし学校の課題解決に取り組むことが重要。
- 学習指導要領改訂
  - ・ 「社会に開かれた教育課程」  
学校と地域社会が「連携・協働」しながら目標を共有し、子供たちの豊かな教育を実現していくという方向性が新たに打ち出された。

- ・ 「主体的で対話的で深い学び」  
学習の意義を共有し、全ての教科で①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力、③学びに向かう力、人間性の3つが大切にされていくこと。
- ・ 「カリキュラム・マネジメントの確立」  
「広島版 学びの変革アクション・プラン」と方向性が同じ。生徒自らが課題を持ち課題の解決をはかり、獲得した知識を元にその知識を活用してまた新たな学びを続けるというサイクルを回す。健康・安全・食に関する資質・能力を踏まえ、様々な取組を教育課程を中心に据えながら、組織的かつ計画的に実施し、教育活動の質の向上につなげていくこと。

○ 文部科学省組織令の一部改正に伴う組織体制の変更について

- ・ 「学校安全」に関する事務が、新設された「総合教育政策局」の「男女共同参画共生社会学習・安全課」の「安全教育推進室」に移管された。
- ・ 安全安心な共生社会を実現するためには、地域と学校が連携して学校の安全確保に取り組む体制を加速することが必要。安全教育が重要視されている。

(3) 県の動向

- 「幼児期から大学・社会人まで」を見据え、「オール広島県」で生涯にわたって主体的に学び続け、多様な人々と協働し新たな価値を創造できる人材を育成し、広島で学んで良かったと思える日本一の教育県を創造していく。
- 健康教育に関わる主要政策の具体的な指標としては、学校保健委員会の実施率、朝ご飯の摂取率食事の準備や片付けの実施割合、地場産物の活用割合、安全に関しては避難訓練の実施率、防災に関する資料を活用した防災教育の実施率が挙げられる。

(4) 本県の健康教育の更なる充実に向けて カリキュラムマネジメントの充実

- カリキュラム・マネジメントとは、学校の教育目標を実現するために具体的で効果的な教育課程を編成していくこと。「教育目標を具現化させる」に為にどうしたらいいか。
  - ・ 「児童や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと」  
健康教育をより効果的に実践していくため、学校の実態に応じて教科横断的な視点から教育課程を編成することが今求められている。
  - ・ 「教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと」  
学校の教育目標を元に体制を整備し、児童生徒の実態とニーズ課題等を把握し、具体的な数字やデータから方針・方法を決定、計画作成し実施、評価し点検を行い計画を次の方向に回していく。プロセスが適切に行われているかどうか、指標を軸にPDCAサイクルを回し続け、より効果的に実施すること。
  - ・ 「教育課程の実施に必要な人的又物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと」  
地域の教育資源や学校環境を具体的に把握することが必要。参加した地域大人の学び生きがいにもつながる。「学校を核とした地域力強化プラン」の一つ、「コミュニティー・スクール」とは、保護者や地域住民が一定の権限と責任をもって学校運営に参加し、ビジョンを共有し目標の実現に向けて協働体制を確立すること。学校は地域力の強化にも関わっている。

(5) おわりに

- 我々教職員が自分の頭で「生徒に身に付けさせたい力は何なのか」、「そのために自分は何をすればいいのか」、「何ができるのか」、をまず考え、管理職を交えた教職員同士での積極的な議論につなげる。教職員間でコミュニケーションを取り合いながら、積極的に前向きな意見を出し合ってほしい。
- 「連携」・「協働」の意味。連携とは目標を共有し目標に向かって計画的に活動が実施できる体制づくりが行われるようになること。「連携」の先に「協働」の段階がある。協働とはお互いに欠かせない関係になっていくこと。学校教育全体で健康教育を実施していくには、この教職員間の連携が非常に重要。この先地域とどう連携していくかが非常に大切。
- 複雑な健康教育の課題に向き合う為に、学校・家庭・地域が同じ方向を向き連携して協力し合い、それぞれの役割と責任を自覚しつつ、地域全体で子ども達の学びを支えていく体制づくりを目指していく必要がある。社会との連携、協働は「学びの変革」を行う上でとても大切。
- 学校保健委員会の設置と存続が大変必要不可欠となる。積極的な活用を。

1.1 講演（食育）

演題 「実践につながるこれからの食育」

講師 広島女学院大学人間生活学部管理栄養学科 教授 渡部 佳美先生

(1) 子どもの食の現状と課題を整理する

- ・ 子どもたちの食生活をみると、朝食の欠食・小児肥満の増加・孤食と食を取り巻く課題がたくさんある。
- ・ 朝食を毎日食べる小学生が9割弱と中学生8割、残りの約2割は朝食摂取の習慣が付いていない。
- ・ 朝食欠食の理由は、食欲がない・食べる時間がない・朝食が用意されていないである。
- ・ 朝食摂取の課題として、食べていないこと・食べていても野菜が不足していることがあげられる。
- ・ 朝食を食べる習慣を付けることが、生活リズムを定着させるために必要である。
- ・ 筋肉量が少なく痩せ形の子どもの増加しており、運動不足と食事量の減少の両方が起こっている現状による痩せ形の子どもたちが問題視されている。
- ・ 食事を子どもだけや一人で食べる状況が増えており、大人が介入していないこととなり、しつけの場面を果たす食事の場面として役割を果たすことができない状況となっている。
- ・ 農林水産省のホームページには、子供食堂と連携した地域における食育の推進が掲げられており、子供食堂は、子供にとっての貴重な共食の機会の確保・地域コミュニティの中での子供の居場所を提供という意義がある。



(2) 学校給食を教材として活用する

- ・ 第3次食育推進基本計画では、若い世代を中心とした食育の推進・多様な暮らしに対応した食育の推進・健康寿命の延伸につながる食育の推進・食の循環や環境を意識した食育の推進・文化の継承に向けた食育の推進の5つが重点ポイントとして掲げられている。

- ・ 学校における食育の推進にとって、子どもが記憶に残っているものをつなぎ合わせて効果的に指導を行っていく、それをつなぎ合わせる総合単元学習の考え方が必要な方法である。
- ・ 子どもたちに実践力をつける食の授業として、子どもたちが考えて自ら自分の課題に気付いて、そこから何を実践していけば良いか具体的な目標を設定して行っていくことが求められている。
- ・ 学校給食は、児童及び生徒の心身の健全な発達に資す・児童生徒の食に関する正しい理解と適切な判断を養うことを目的とし、学校教育活動の一環として行われている生きた教材と呼ばれるものである。
- ・ ねらいを明確にした献立を各教科と関連させて、郷土に伝わる料理を取り入れて生きた教材として学校給食を活用していく。
- ・ 地域独自の郷土の味や家庭の味を子どもたちに伝えていくためには、直接聞いたり食べたり一緒に作ったりすることが大切である。
- ・ デリバリー給食では、入っている郷土料理や地場産物を取り上げて、毎日繰り返し子どもたちに教育することで学校給食が生きた教材として使われていく。
- ・ 平成30年の学校給食実施基準において、学校給食における対応のみでは限界がある栄養素もあるため、家庭への情報発信を行うことが追加されており望まれている。
- ・ 給食指導の基本的な進め方として、発達段階に即して学校全体で統一して繰り返し行うことが必要である。



### (3) ライフステージ別の食課題を把握する

- ・ 子どもの健康を考えていくうえで、子どものそれまでとこれから先のこと、最後まで口から食べる喜びを知るという部分が必要である。
- ・ 健康日本21において、すべての国民がライフステージに応じて、健やかで心豊かに生活できる活力ある社会を実現してこうという形で取り組みがなされている。
- ・ 次世代の健康という点で、健康な生活習慣を有することの割合の増加・朝昼夜の三食を必ず食べることに気をつけて食事をしている子どもの割合の増加・運動を習慣的にしている子どもの割合の増加が目標数値として掲げている。
- ・ 超高齢社会の中で、嚥下困難者を対象とした高齢者の食の需要が高まっており、凍結含浸法に着目している。凍結含浸法とは、凍結した食材に酵素を注入し、形はそのままだがスプーンでつぶせるほど軟らかい食事のことである。
- ・ 最後まで口から食べるためには、食育を若いうちから行うことで高齢者の食も広がっていく。生涯を目指した健康、一生涯健康で食事を行うためには幼少期からの食育がとても大切である。

### (4) これからの学校における食育を考える

- ・ 家庭の教育力は低下しているが、家庭の中で食事が最も大切にされており、コミュニケーションの場として使うことを提案する。
- ・ 今後の学校における食育のあり方について文部科学省では、①食育に関する指導内容・方法について②学校給食の充実について③栄養教諭の配置・役割について④家庭・地域へのアプローチについて推進していくことが大切と言われている。
- ・ 学校全体で食育に取り組む体制づくりが大切である。

- ・ 食育の推進における内容としては、目標と評価を明確にして、PDCA サイクルをまわしていく、そして学校給食を評価の対象にするなど生きた教材として活用する。
- ・ 中学生の食だけでなく、高齢者の食のところまできちんととらえて、子どもたちの今いるライフステージの中を見てもらいたい。
- ・ チーム学校で行っていく食育、家庭へも波及効果をもたらすような食育の推進が各学校でなされることを期待している。

